

【紹介】

富澤修身著

『都市型中小アパレル企業の過去・ 現在・未来——商都大阪の間屋 ともの作り』

創風社、2018年刊
265頁、2400円+税

国際ファッション専門職大学
富澤修身

私は、一昨年（2018年）の夏、本書を出版した。

目次は、以下の通りである。

- 第1章 戦前期大阪の繊維関連問屋卸商について
- 第2章 大阪の中小羅紗製品・紳士既製服企業史
- 第3章 ワンダラーブラウス
- 第4章 戦後大阪の中小繊維アパレル企業変遷史
- 第5章 戦後におけるアパレル縫製業の変遷
- 第6章 大阪の繊維ファッション業界の構造とイノベーション指向度
- 終章 アパレル産業からファッション産業へ

前任校である大阪市立大学の商学部で「大阪ビジネス論」を講義するなかで、大阪で生まれ育った学生でも大阪経済の基礎の1つが繊維産業にあったことが理解されていない状況に幾度か直面した。また、公立大学として大阪に関する講義を提供し、学生の大阪理解を深めることが求められてもいた。これらの事情から、大きな含意を引き出せる繊維と問屋を対象に本書を執筆することとなった。

方法としては、経験的手法である歴史研究のスタイルを採用した。しかも在職学部の提

供科目にふさわしく企業を分析単位とした。オリジナルデータとしては、1990年代初めに降約25年間かけて収集していたインタビュー記録を活用した。対象は広範囲の大阪繊維産業のうち、研究史の空白であったアパレル産業の発展史に限定した。

オリジナルデータを作成するにあたっては、関西ファッション連合の事務局と組合員企業の皆様と、とくに中国に関連するデータでは上海にある東華大学（旧中国紡織大学）服装学院の楊以雄教授（当時）の協力が不可欠であった。

大阪のアパレル産業史は誰かが書かなければならないテーマではあったが、紳士服、婦人服、子供服、ニット服を含み、その担い手であった問屋と縫製業の双方を含み、輸出向けも内需向けも含み、しかも1990年代以降になると中国進出、イノベーションとの関連、大手企業だけでなく小零細企業も射程に入れる必要があるなど膨大な作業となり、その執筆には誰も手を出さなかった。それゆえ完璧ではないが、必ず参照すべき書物として本書の公刊の意義は大きいと考える。

大阪ビジネスの特徴として、中小零細企業の役割が大きいこと、問屋の存在が大きかったことを挙げることができる。問屋は1960年代の間屋無用論のなかで旗色が悪くなり、商社と自己定義する企業が多かったが、現代のもの作りの特徴、つまり生産の外注化と広範なネットワークの活用を考えると、問屋というビジネスモデルを再評価する必要があるだろう。これが本書の原点である。

本書の特徴の1つは、地域産業と地域の生活文化との関連まで踏み込んだことである。地方創生と関わって地域の文化の大切さが改めて強調されるが、大阪ビジネスの場合どこにそれを求めることができるのか、が問われた。とくに欧米からの導入模倣・学習に終始してきたこれまでの企業のあり方から転換する場合、普遍性と地域性の双方を満たす価値がそもそも大阪にあるのかとの問いに答

える必要があった。この点を論じたのが、本書の終章であった。

大阪ビジネス論には、無論多様なアプローチがあってよい。本書は、そうしたアプローチの1つであり、しかも不可欠なアプローチの1冊といえる。本書は、大阪ビジネス論に関心を持つ誰もが一度は手にし参照することになる1冊であることを確信している。

日野真紀子

『シルクとイタリアン・ファッションの経済史——色で高付加価値化を目指した両大戦間期』

晃洋書房、2019年刊
233頁、5700円+税

国際ファッション専門職大学
須網美由紀

本書は、現在、近畿大学経営学部において教鞭を執る日野真紀子氏が、2017年に大阪大学大学院経済学研究科に提出した博士論文を核として、加筆・修正を加えて完成させたものである。著者は、イタリアの繊維製品の転換期となったと考える両大戦間期（1920-30年代）に期間を絞り、先行研究で看過されてきた染色・プリント（捺染）工程という技術的な側面から、人造絹糸（人絹）を含む絹織物製造と販売を中心とする絹織物業の発展の様相を解明し、現代にいたるイタリアン・ファッションの繁栄の発端が戦間期にあったことを明らかにしようと試みている。

本書は、序章、本論6章および終章から構成される。

第1章「1920-30年代におけるイタリア経済と絹・人絹織物製品の輸出」では、1920年代と1930年代、すなわち世界恐慌を挟んだ2つの年代における通商状況、人絹を含む絹織物輸出货量と輸出額、および輸出先国で好まれた製品について、統計データ

等を用いて分析・検討し、イタリア経済における絹・人絹織物製品の輸出の重要性と、1930年代後半には、なかでもデザインに優れた染色・プリント物に輸出の増加がみられ、高付加価値化が起こっていたことを確認している。

第2章「流行の色を創る技術—1930年代における化学工業の発展と染料工業」では、高付加価値製品の製造を可能にした、1930年代の染料工業の成長の実態を考察している。1920年代から1930年代の染料企業は、ドイツなど海外の化学企業の最先端技術を取り入れた結果、染料や化学製品を自国で安価に製造できるようになり、単価のより高い、多彩でデザインに優れた染色・プリント物の輸出の増加につながったと推論している。

第3章「流行の色で製品を創る—1930年代の染色・プリント工業の形成と製品の変化」では、1930年代からの染料開発と関係の深い染色工業について考察している。「染料を消費する産業」として政府から重要視された繊維工業は、染色設備を持たない企業に対して「受託染色」という形態で受注を拡大し、染色・プリント・仕上加工工程の生産性を向上させた結果、多様なデザインのプリント絹織物やニット・靴下製品など、新しい繊維製品を誕生させる契機になったことを指摘している。

第4章「付加価値の高い製品を創る—絹織物産地コモ地方の変遷と技術への対応」では、絹織物産地であるコモ地方に焦点を当て、両大戦間期の技術革新と通商環境の変化への対応について論じている。もともと養蚕・製糸業が盛んであったコモ産地では、1920年代に、人絹を含む絹交織など大衆商品を製造する大企業と、中小企業を中心とした高級絹織物製造が併存する状況が生まれた。世界恐慌期になると、コモ地方の企業はさまざまな困難に直面するが、縮小した販売を回復させるために、品質改善などの対応策が採られたこと、専門知識を持つ人材の育成、および流